

慶應義塾に関連した出版物や教職員の新刊著書などを中心に、本に関する情報をお届けします。

進化学・遺伝学・脳科学から 何を学ぶべきかを問いかける

『なぜヒトは学ぶのか—教育を生物学的に考える』

安藤寿康（文学部教授）著
講談社現代新書／907円（2018年9月）



「教育とは何か?」「学ぶとはどういうことか?」こうした根本的な疑問に生物学的にアプローチした画期的な教育論。大きく3部に分かれ、第一部「教育の進化学」では「人間は教育する動物である」ことを文化人類学の知見も援用しながら解説。第二部「教育の遺伝学」では、能力に遺伝的な個人差があることを認めた後に人が学ぶ意味を問いかける。そして、第三部「教育の脳科学」では、最新の脳研究の知見と学ぶことの関連性を俯瞰しながらヒトに特有な「教育」という仕組みを生み出した「教育脳」の研究の必要性を示唆している。著者によると、本書は義務教育を終えた後に学ぶことを選択した高校生・大学生向けに書かれているという。

教職員執筆の新刊

●武藤佳恭（環境情報学部教授）ほか著

『発見・創発できる人工知能OTTER—論理パズルからのアプローチ』
近代科学社／3996円（2018年8月）

●松沢裕作（経済学部准教授）著

『生きづらい明治社会—不安と競争の時代』岩波ジュニア新書／864円
（2018年9月）

●菊澤研宗（商学部教授）編著

『ダイナミック・ケイバビリティの戦略経営論』中央経済社／3024円
（2018年9月）

●高橋孝雄（医学部教授）著

『小児科医のぼくが伝えたい 最高の子育て』マガジンハウス／1404円
（2018年9月）

●吉川肇子（商学部教授）ほか著

『ゲームと対話で学ぼう「highメソッド」ナカニシヤ出版／2376円
（2018年10月）

●巽孝之（文学部教授）著

『パラノイドの帝国』大修館書店／2376円（2018年11月）



慶應義塾この一冊

『小泉信三』

—天皇の師として、自由主義者として—

小川原正道（法学部教授）著
中公新書／842円（2018年11月）



第2次世界大戦後、皇太子（現在の天皇陛下）の師として戦後民主主義の時代にふさわしい帝王教育に尽力したのが、慶應義塾長として戦時下の苦難を乗り越えた小泉信三である。長じた皇太子殿下に民間から美智子妃を迎えるなど、私たちが知る「新しい皇室」像の基盤は彼によってつくられたといっても過言ではない。来る4月30日に天皇陛下が退位し「平成」の時代が終わる。慶應義塾に縁のある方々はあらためてこのオールドリベラリストの生涯を織り込んでみてはいかがだろうか。